広報おおいしだ 2019／6 No.756

別冊 おおいしだものがたり
～資料館資料編～

■『紅色の靄』 大石田と文芸展より

今回は資料館で開催中の「大石田と文芸展」より、齋藤茂吉随筆『紅色の靄』直筆原稿をご紹介します。

齋藤茂吉の、歌人という一面はよく知られたところですが、実は万葉集の研究家でもあり、優れた随筆の名手でもありました。いずれもその文才は高く評価されています。

柿本人麻呂をはじめとする和歌の研究書は論理的で隙が無く、これは何事も根を詰めずにはいられないという茂吉の性格に由来するものなのでしょう。高い壇上から演説をするような、読者にも緊張を強いるかのような論調です。

それに対して随筆は、日常の事、短歌のこと、思い出語りなど内容は多岐にわたりますが、どれもどこか気の抜けたようなおかしみが含まれています。茂吉の次男である北杜夫はこのような点を「おのずからなるフモール」と評しています。自然に備わっていて、にじみ出てくるユーモアといったところでしょうか。それが随筆という形式をとると、顕著になるようで、気の置けない人との語らいを傍で聞いているような心地よさがあります。

ところで、芸術作品を鑑賞することを「味わう」と表現したりしますが、何かを味わうには、時間がかかるものです。相対した作品を味わうには、咀嚼し、時に反芻する作業が必要だからです。しかし、事文芸作品に関しては、あまり時間をかけない傾向はないでしょうか。日々できるだけ早く内容の理解を強いられる私たちにとって、一大巨編ならまだしも、随筆のような短文や、まして３１文字を基本とする短歌などはほんのわずかに目を通しただけで、とりあえずは読めてしまいます。これでは噛まずに飲み込むようなもので、堪能したとはいえません。

『紅色の靄』には、「きさらぎの日いづるときに紅色の靄こそうごけ最上川より」の歌とともに、その光景を目にし、作歌した前後のことが主な内容です。その場に立ち会えた感動や「紅色の靄」という造語を思いついた嬉しさはとても無邪気に、その一方で歌集『白き山』の初版にこの時の歌を収載し忘れたことは自嘲気味に、茂吉特有の丸みを帯びた筆文字で綴られています。くせのある字は読みにくいとも感じますが、一字一字を拾いながら読んでいると、文章と文字に独特のリズムが生まれ、しだいに内容が深く浸透していくようです。

活字に親しんだ私たちにとって、活字になる前の、作者の手による文字はすらすらとは読めませんが、そのことがかえって作品を味わうことにつながるのかもしれません。時にはじっくりと文芸作品の世界に浸ってみてはいかがでしょうか。

「大石田と文芸展」は8月12日（月）まで

楽がき帳

トムソーヤの冒険in最上川のボートに子どもたちと一緒に乗り込んで取材しました。前日に雨が降った影響で川の水位は少し上がっていて、子どもたちが楽しみにしていた水鉄砲は体が冷えてしまうため中止に。川に足を入れると確かにかなり冷たい。流れも早く、ボートはすいすい下流へ。

水面からの景色を楽しみながら黒滝橋を過ぎ、ゴールの川前地区に近づいたあたりで、水鉄砲はダメでもパドルを使うことを思いついた子どもたち。水面をたたくようにして水をかけ合い、ずぶ濡れに。楽しいのは一瞬で、下流側から吹く冷たい風にブルブル震えながらなんとか上陸しました。

カメラは壊れないのかと皆さんに心配されますが、一応防水なので大丈夫です。（あ）

町の人口 令和元年６月１日現在

世帯数	2,351 戸	（＋３）
総人口	7,038 人	（－５）
男	3,456 人	（－３）
女	3,582 人	（－２）
（５月中の異動）		
出生	２人	転入 16 人
死亡	12 人	転出 11 人

※この数字は外国人数も含めた数字です。

◇編集・発行 大石田町総務課
〒999-4112 山形県北村山郡大石田町緑町1番地 ☎0237-35-2111 FAX 0237-35-2118
◇印刷／寒河江印刷㈱